

いこいのみぎわ

No. 80

2021年9月19日～9月25日 各家庭でのディポーション用テキスト

[私を愛し 信じ ほめますか]

私の心の喜びよ 私の愛する子よ
私があなを緑の谷に導くときにも
静かなみぎわに伴うときにも
火の中に導くときにも
沈黙する雪の下に埋もれさせるときにも
どんな雲に覆われるときにも
どんな風が吹くときにも
あなたは私を愛し 信じ ほめますか

でも私は恐れませんが 私は舞い上がります
愛する救い主の愛が 翼を与えられるから
そこで私は答えます
あなたを見上げ 心から申します
私はあなたを愛し 信じ ほめますと

エミー・カーマイケル
Toward Jerusalemより

おお 愛する主よ 私は臆病な小鳥です
どんな所 どんな天候のときでも
空高く上って歌えるほどのものではなく
じっとうずくまっている小鳥です

■忍耐の訓練 (1/5)

彼は……目に見えない方を見るようにして、忍び通した。(ヘブル 11:27)

抗張力は忍耐力を真にテストするものである。外部の力によって無残にも引き裂かれ、しかもなお心の平静さを失わず、立場を守り通し、とりわけ内なる高潔さを持ち続けることは、この忍耐の訓練を知ることである。反対が起こったときに走って逃げ、危険が迫ったときに隠れ、不親切なあるいは不正なことばを浴びせられたときに反論することと、主の救いを見るために静かに立ち、正しいさばきをする方にいっさいをゆだねて舌を押さえていることとは、全く別のことである。

モーセは荒野での幻滅の経験を通して、この忍耐の訓練を学んだ。彼にとって、エジプトは単なる蜃気楼であることが明らかになった。パロの家族は、彼にとって少しも霊的な助けとはならなかった。パロの娘の子とされても、たましいの奥底は満たされなかった。宮廷のエチケットも、彼のうちに忍耐力をつくり出すことはな

かった。彼は自分をさげすまれている同胞と等しくするために、地位を捨てた。しかし同胞は彼をはねつけたのである。彼は荒野に行った。荒野は、たましいの苦難のために彼が必要とした孤独を提供した。

しかし、ある日ついに、荒野での訓練は終わり、神と人への奉仕がモーセに課せられた。彼は燃える柴の中から、神のご命令を聞いた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見……た。今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ」（出エジプト 3：7、10）。

何ということであろう。パロといえば、モーセがその手を逃れて来た人ではないか。イスラエルといえば、モーセをさげすんだ人々ではないか。とんでもないことだ。どうしてそんなことができよう。一度失敗したのだから、もう一度失敗するに違いない。モーセはこのような理由をあげて、神のおことばに反対することができた。「私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行ってイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならないとは」（11 節）。

このモーセの嘆願に対して、至高者なる神の答えはただ一つ、「わたしはあなたとともにいる」ということであった（12 節）。この使命を遂行するに当たって、どのような難局があり、問題があり、侮辱があり、不可能事であろうとも、モーセは神のご臨在を期待することができた。そして、このご臨在のゆえに、「目に見えない方を見るようにして、忍び通した」のである。

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第三十章「忍耐の訓練」より】
※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。